
学部教育との連繋日本語教育

——漢字系留学生を中心として——

宮 城 典 江

目 次

- 1 はじめに
- 2 留学生について
- 3 大学における日本語教育
- 4 学部教育との連繋重視の日本語教育
- 5 おわりに

1 は じ め に

昨今、日本の国際社会における経済の発展及び科学・技術の進歩、またそれらの発展や進歩過程に対する興味ともあいまって、日本に対する関心が非常に高まり、日本をあるいは日本に学ぼうという風潮が世界のあちこちで起こっている。このような状況に伴い、国の内外を問わず日本語学習者の数は急増の一途を辿っている。

日本語教育史におけるここ50年間程の留学生の往来を振り返ってみると、従来は国費・私費を問わず日本学、日本文学及び言語学等の専門家や外交官等の厳選されたごく少数のエリート留学生が日本語課程から専門課程への移行をかなり自律的にしかも割合スムーズに遂行してきた。しかし数年来の留学生受け入れ体制の整備・充実効果に伴い、留学生の学習目的の多様化や専

専門分野の範囲拡大が目立ち、彼らの背景や資質もますます多様化して来た。したがって、このような状況に対応できるような種々の調査研究の重要性、内容・教材及び教授法の充実と向上、そして適任の教授者の必要性が大学でも一般日本語教育機関でも改めて強調されているのである。

本稿では、国内の大学学部籍を置き、それぞれの専門分野の勉学に取り組んでいる外国人留学生、特に漢字系留学生に焦点をあて、彼らに対する日本語教育の現状、ニーズ、問題点とその解決方法、今後の課題等について取り上げる。

ほとんどの留学生にとって日本語学習の目的は、それぞれの留学中の生活及び専門の勉学や研究を遂行するための手段としての日本語能力の獲得であって、専門課程に入るまでには必要な諸能力を是非とも身につけなければならないのである。彼らは入学時には、日本語能力試験1級合格程度の日本語力を有することが期待されてはいるものの、上記の必須レベルには十分に達していない者が多いのが実情である。このギャップを埋めるべく、多くの場合大学の3年次から始められる専門課程の授業への「橋渡しの」日本語教育が必要であるし、他方、1・2年次で既に一般教育科目と専門教育科目の垣根を取り払って一体化を図っているような大学では、基本及び専攻科目との「同時並行的」日本語教育が必要である。本稿での漢字系学部留学生に対する日本語教育は、特に学部教育との連繋が効果的に遂行できるような日本語教育を念頭に置いて考察を進めていきたい。

2 留学生について

留学生とは、正確には「外国人留学生」のことであり、「日本の大学等において教育を受ける目的をもって入国し、大学等に入学した外国人学生¹⁾」で、法的に定められた一定の日本在留資格を持つ者と定義されている。定義中の「大学等」には、国・公・私立の大学及び短大、高等専門学校、専修学校、お

表1 留学生数の推移（各年5月1日現在）

	昭和53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成1	2	3	4
国費留学生	1,075	1,183	1,369	1,578	1,777	2,082	2,345	2,502	3,077	3,458	4,118	4,465	4,961	5,219	5,699
外国政府派遣留学生	0	105	419	475	662	863	798	774	895	995	976	934	1,026	1,072	1,058
私費留学生	4,774	4,645	4,784	5,126	5,677	7,438	9,267	11,733	14,659	17,701	20,549	25,852	35,360	38,775	41,804
留学生総数	5,849	5,933	6,572	7,179	8,116	10,428	12,410	15,009	18,631	22,154	25,643	31,251	41,347	45,066	48,561
10万人計画想定概数 ¹⁾						10,428	12,100	14,100	16,300	18,900	22,000	25,500	29,600	34,400	40,000

（注） 1. 外国政府派遣留学生は、中国、マレーシア、インドネシア、ブラジル、タイ及びシンガポールの各国政府派遣留学生である。

2. 「10万人計画想定概数」欄は前期伸び率を年平均16.1%増としての筆者の概算による。

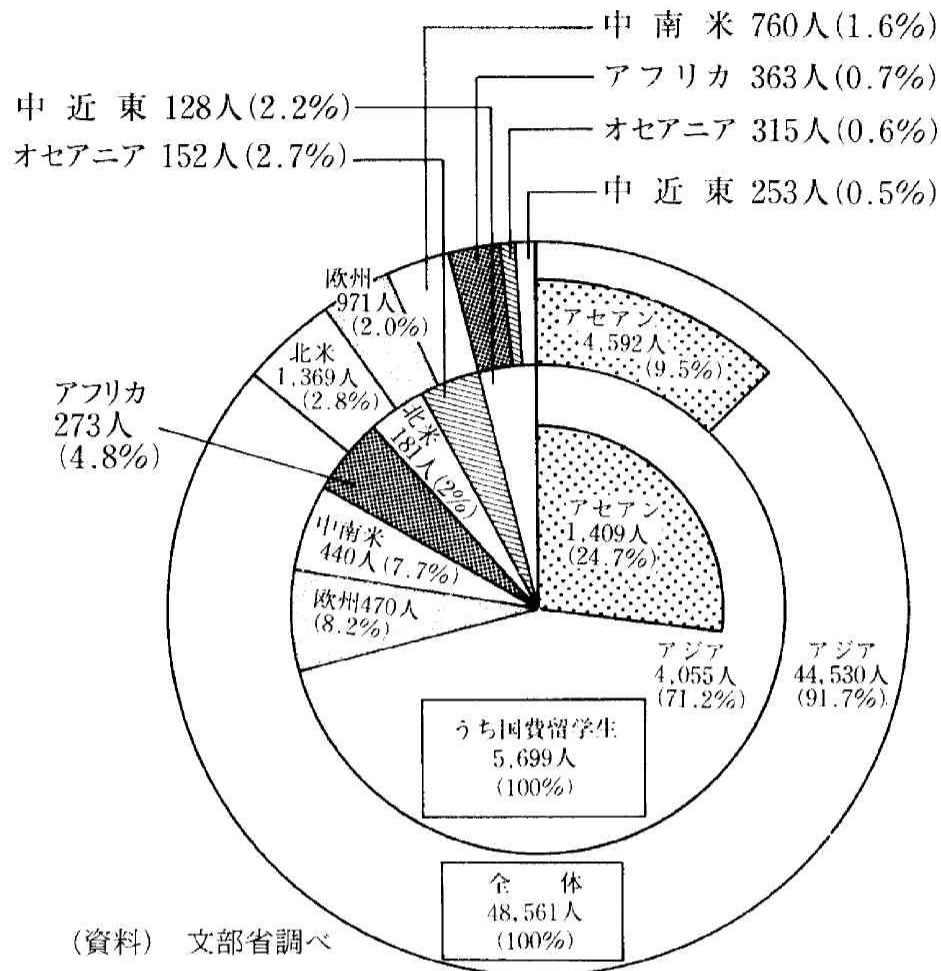
（資料） 文部省調べ（平成5年度：平成5年11月）より作成

よび特に認められた民間の大学等への入学前の予備教育機関も含まれる。²⁾

さて、わが国の大学等に学ぶ外国人留学生の現状を最新の資料（文部省平成5年11月発行）から概観してみよう。まず、表1の留学生数の推移であるが、平成4年5月1日現在で国費留学生数が5,699人、外国政府派遣留学生数が1,058人、私費留学生数が41,804人で、留学生の総数は48,561人となっている。この数は平成4年現在から10年前（昭和57年）の総数8,116人と比較するとほぼ6倍である。また、国費留学生・外国政府派遣留学生に比べて私費留学生数が留学生総数の86%を占めており、この数は当時の私費留学生5,677人と比較して実に7.36倍にも達しているのである。

このように留学生が急増した要因としては、日本の国際的地位の高まり及び諸外国との国際交流・技術協力等の進展と共に、昭和58年答申のいわゆる「留学生10万人構想」以来、多くの学術研究及び教育機関がこの計画を積極的に評価し、留学生受け入れ体制の整備充実を図りつつあることが挙げられる。³⁾『21世紀への留学生政策』では、留学生数が平成4年（1992年）には4万人、平成12年（2000年）には10万人になるものと想定していたが、現実にはこの予想をはるかに凌ぐスピードで増加が進んでおり、平成2年には早くも4万人を超え、予想された平成4年には平成6年度の想定数である5万人にも届こうという数に達してしまったのである。想定より2年も早いペースでの進

図1 出身地域別留学生数（平成4年5月1日現在）



行状況から見ると、今後も更に留学生の増加に一層の拍車がかかることは想像に難くない。⁴⁾

次に図1の出身地域別留学生数と表2の出身国（地域）別留学生数を合わせ⁵⁾ 見ると、全体の91.7%という最大の比率を示しているのがアジア諸国（地域）の出身であり、そのうち中国、韓国、台湾の3か国（地域）の出身学生が合計38,171人でアジア全体の85.7%、留学生総数の78.6%と際立った現象で、これは筆者の所属する機関でも同様の高い割合を示している。この3か国（地域）からの留学生は、いわゆる「漢字圏（留）学生」と呼ばれ、母国語に漢字が用いられている国の出身学生のことを言う。ちなみに「漢字系学生」と呼ばれる場合は、上記の学生を更に広げて華僑子弟として二重の言語⁶⁾

表 2 出身国（地域）別留学生数

（平成 4 年 5 月 1 日現在，単位：人）

国（地 域）名	留 学 生 数
中 国	20,437 (1,299)
韓 国	11,596 (672)
台 湾	6,138 (ー)
マ レ ー シ ア	1,934 (252)
アメリカ合衆国	1,245 (145)
インドネシア	1,154 (367)
タ イ	894 (450)
フ ィ リ ピ ン	503 (293)
香 港	496 (55)
バングラデシュ	479 (294)
そ の 他	3,685 (1,872)
計	48,561 (5,699)

（注）（ ）内は国費留学生数で内数。

（資料） 文部省調べ

生活を送っている学生をも含めて指すことが多い。

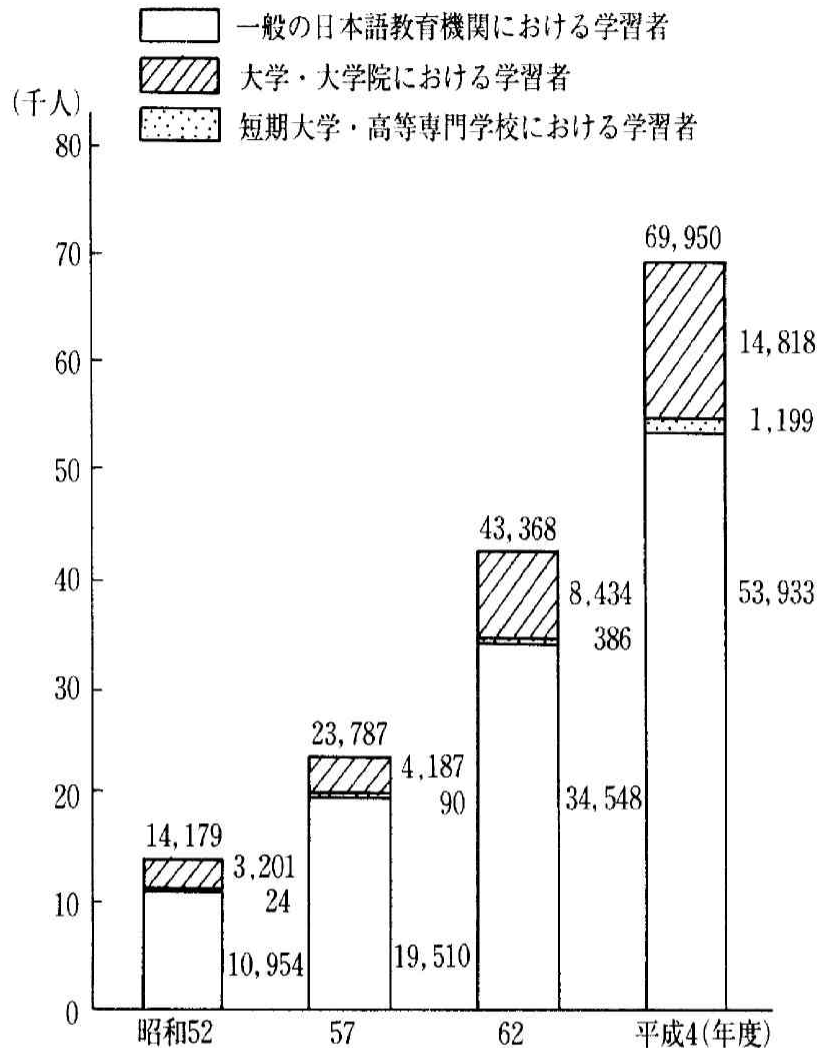
「漢字系学生」の数の多さは、日本との地理的条件のみならず、1881年に朝鮮から初めて 3 名の留学生を受け入れて以来、また1896年に清朝の留学生13名が最初に日本に派遣されたという記録等⁷⁾を見ても、永きにわたる歴史的な結びつきを反映していると言える。

3 大学における日本語教育

3-(1) 日本語学習者について

国内の日本語教育機関において、大学等での勉学・研究、技術の研修、ビジネス、教養として等、種々の目的で日本語を学習している者の全体数は、平成 4 年現在で69,950人に上り、この 5 年間では1.6倍、10年間では約 3 倍、15年間で6.4倍の増加が見られ、更に遡って20年前と比較すると約 9 倍に増加

図2 国内における日本語学習者の推移



(資料) 文化庁調べより作成

しているのである。これらの学習者のうち、大学等（大学院・大学，短期大学及び高等専門学校）に留学中の日本語学習者については図2の資料で概観すると，平成4年現在で16,017人（うち大学院・大学は14,818人）に達している。この5年間では1.8倍（大学院・大学も約1.8倍），10年間では3.7倍（大学院・大学は3.5倍），15年間では約5倍（大学院・大学は4.6倍）の増加となっているのがわかる⁸⁾。

平成4年度の大学院・大学で日本語を学んでいる留学生数約15,000人という数字が，日本語学習者の総数である約70,000人や第2節で見た留学生総数の48,000人と比較すると格段に低いのは，大学院や大学に在籍している留学

生のうち、①既に日本語学習課程を修了している者、②専攻の勉学や研究の性質上日本語学習を目的とも手段ともしない者、それに、③日本語科目が設置されていない大学で学んでいる者、等がかなりの数を占めているためである。

以上が日本語学習者数の推移である。前節で概観したここ10年の留学生数の急増と同様に、日本語学習者の増加にも著しいものがある。その増加の要因も、日本語教育体制や内容あるいは教授法の発展・進歩の成果というよりはむしろ政治・経済面における日本の国際的地位の確立がもたらした結果である方が大きいかもしれない。

3-(2) 専門課程の内容と日本語能力のギャップ

日本の大学で学部の専門課程を履修する者は日本人・外国人を問わず次の諸点の能力が必要とされる。⁹⁾

1. 講義の理解、要約してノートを取る能力
2. 専門分野の文献の講読と研究能力
3. 資料の収集・調査・分析能力
4. ゼミ等における口頭表現（発表・討論）能力
5. 書き表現（答案・レポート・論文作成）能力

これらの必須事項を十分に満たすには、外国人としては日本人並みの相当高度な日本語能力が要求されるが、同時に大学レベルの知的対応を聴解・読解・作文・会話等すべての言語活動に反映できなければならない。そのため¹⁰⁾には大学入学時までの前提条件としての日本語能力がいくつか挙げられる。

1. 日本語の正しい音声組織が身につき、音声による言語生活ができること
2. 短文から複文へ、文型拡張や文法構造の理解が定着し、使えること
3. 文字は当用（常用）漢字を大体修得して5,000語程度の語彙があること
4. 辞書が引きこなせ、語彙の増加や表現の拡大がはかれること

などである。

しかし、これらはいくまでも理想的な前提条件であって、現実にはこの条件から程遠いところに位置している留学生も少なくない。先にも述べたように彼らは日本語予備教育を修了し、日本語の試験にも合格してきたのであるが、その予備教育というのも日本語力ゼロから始めて1年間ほどで約1,000時間、すなわち、我々日本人が中学、高校、大学の教養課程の計8年間で受ける英語教育の授業時間とほぼ同時間数という極めて凝縮した大学受験用集中教育なのである。大学合格率を考えると教育内容・方法ともに高い評価を受けてはいるが、予備教育修了あるいは日本語能力試験1級合格といっても60/70点～100点の間であるため、入学者すべてが大学教育に直に対応できるレベルにあるわけではないのである。しかし、だからと言って大学での初級・中級レベルの繰り返しは望ましいことではない。前提条件と現実との間にはかなりのギャップが存在し、入学後における留学生の学業遂行には種々の問題が生ずると予想される。日本語習得でのどの側面に問題点があるかについてはこの節の(4)項で詳述するが、次項(3)では外国人留学生が日本語の授業でどのような学習内容を求めているかについて述べてみる。

3-(3) 学部留学生のニーズ

筆者の所属する大学学部の日本語授業においては、開設当初2・3年間、留学生のニーズを探るため授業開講前の1・2週間の間に授業に関する受講学生の希望などを非公式にはあるが記入及び面接方式で述べてもらっていた。留学生の日本語教育に対するニーズは、その到達目標や将来の希望から見てもそのまま彼らの社会のニーズであることが窺える。

まず留学生の背景——国籍、年齢、母語、母語による教育レベル、滞日期间、日本語学習経験（学習期間・予備教育機関・学習形態・使用教材・教授法）、現在の言語環境——についての質問、次に授業内容に対する彼らの希望を尋ねてみた。結果は学会口頭発表や学会誌等で報告される種々のアンケート

ト調査・分析の結果とあまり変わらない項目が挙げられた。すなわち、前項に箇条書きしたところの大学入学時までに必要な前提条件としての日本語能力に対する補強・矯正・伸長や大学学部の専門課程での必須能力の養成による日本人並みの日本語能力の獲得ということである。その他に希望件数としては上位を占めなかったものの注目に値するものもいくつかあった。例えば

1. 長い文章を読み、書く訓練
2. 専門用語の増追加
3. 自然な発音・イントネーション・速度で話す／音読する訓練
4. 敬語を正しく使って話す／書く訓練
5. 研究室・実験室事情／文化への適応法
6. 日本語そのものではなく、自己能力の開発法や独学習の効果的方法等である。

1. ではゲーム的でもよいからことさらに長くて複雑な文章が解説でき、長くても論理性のある文章が書けるようになる訓練を希望し、2. では基礎的で恒久的な用語の他に日毎に新出する用語をできるだけ蓄積し、3. では留学生の発音やアクセントに対する問題意識が強く、初級時の単調ではあるが組織的な訓練の再度必要性を述べ、4. では敬語の使用・非使用に対する基準の欠如や、不正使用してもコミュニケーションは可能なため周囲からの指摘や矯正が得られないことへの不満から再訓練を要求し、5. では理学部の留学生が共同研究や実験を行う際には周囲の協力やスムーズな意思疎通が不可欠であることを認識し、協働や師弟関係における適応のための常識や有形無形の日本語行動を獲得したいと希望し、6. では週に2限しかない日本語授業の効果を他の基礎や専門領域科目に最大限に連繋できる最短の方法を獲得したい、等が挙げられている。

日本という言語環境の中で生活している漢字系留学生は日本語学習に関しては欧米のような非漢字圏からの留学生に比べ言語的・文化的背景の有利さを備えている。と同時に学部や大学院で勉学や研究に取り組み学位取得を前

提としている故の切実さをも持っているのである。本来の目的——学位取得と目指す企業・機関への就職——に対応するために必要な日本語習得だけでは満足せず、日本語を完全にマスターしようという意欲意識を持っている学習者が多く、外見・容姿の類似性をもプラスに活用し、日本人と間違えられるくらい日本語行動を自由自在に駆使したいという真剣な留学生によく出会う。ある留学生のアンケート備考欄に「日本語運用に関して『実は自分は中国人／韓国人なのだ』と断りを入れなければならないくらいの日本語力が欲しい」というのもあった。このような留学生のさまざまなニーズに対応できるよう、我々教師には授業内容の多様化・複線化の工夫が迫られていると考えられる。

3-(4) 漢字系学生の日本語学習上の問題点

3-(4)-1 総合的な問題点

まず問題になるのが、学部留学生の「読む」「聞く」「話す」「書く」等の日本語学習の総合的な能力面である。学部入学前の1～1年半の短期間に受験日本語としてあれもこれもと詰め込まれたためか、あるいは留学生本人の能力によるのか、これら4技能の分野で未消化のままのものがあったり、能力の不均衡が影響を及ぼしたりしていることが多々見られる。以下に掲げる項目は、漢字系学生のみならず外国人全般に当てはまる問題点である。¹¹⁾

1. 日常会話での発話には不自由しないが、構文上の誤りが頻出するもの
2. 4技能には優れているのに、発音・アクセント等に問題があるもの
3. 日本語の生の文章を読みこなす理解力を持ちながら、その文章の内容の要点や、それについての自分の考えをまとめて、口頭や文章で表現する力が著しく低いもの
4. 語彙も豊富で複雑な文型も使おうとするのだが、正確に運用できないため、不自然で意味のわかりにくい文を作ってしまうもの
5. 一見自然な日本語で、初級文法上の誤りは目立たないが、簡単な日常

会話で使われる文をそのまま文字化したような文、つまり単文の羅列とも言える幼稚な文になってしまうもの

6. 文レベルではうまく書けても、文章レベルのものが書けなかったり、日本語らしい表現が未確立なもの

7. 精読の訓練はできていても、速読・多読の経験はほとんどないもの

8. 生活語彙数は豊富なのに、専門用語の少なさ、慣用語・擬音語・擬態語・外来語等の理解と運用の不充分さが目立ち、加えてこれらの特殊語彙の運用に対する自信のなさが語彙の非使用を招いてしまうもの

等が挙げられる。

3-(4)-2 漢字の問題点

欧米などのような非漢字系学生は、漢字の字体を見ると戸惑いを覚え「マッチ箱をひっくり返したような」という表現が当てはまるような感じを持つという。これが漢字系学生となると、漢字で書かれている日本語に接する時、発音は異なっているとしてもそれをすぐ文字として目に捕らえる訓練ができており、その意味をも知ることもできる。しかし問題は同一表記を取る漢字語彙の場合でも、意味が常に同じだとは限らず、日本語・中国語・韓国語それぞれ漢字語彙が示す意味領域ないし語感に、まったく同一のものから、まったく異なるものまで広く分布しているというところにある。加えて、日本語としての漢語の中には、中国語として同じ形が存在しないものも少なからずある¹²⁾ということである。

また日本語授業で教科書を音読させて気がつくことは、一つの漢字が音・訓でしかもそれぞれに二つ以上の読み方がある場合等、学習者は読み方に推測はできても自信を持って読めないことがあり、漢字系学生にとっての漢字学習にもそれなりの難しさが伴うものだというところである。

3-(4)-3 発音・アクセント等の問題点

韓国人や中国人がそれぞれ日本語を話す時「顔を見なくても韓国人・中国人とわかる」とよく言われるのは、母語の表現上の特徴や音韻体系の特徴の

現れであって、これは母語の干渉によるものである。漢字系学生の発音・アクセント及びイントネーションには大部分の学生に起こりがちないわゆる傾向的な誤りがよく見受けられる。

我々はよく日本語の発音は母音・子音の数や音節の種類が少ないため易しいと聞くが、それは必ずしも漢字系学生にとっての発音の易しさを意味しないのである。

まず、発音の誤りでは、①母音の長短の混同[一生：一緒]，②清濁音の転倒・混同及び破裂音[天気：電気]，③特殊音素の脱落や挿入（促音[実習：自習]，撥音[担任：他人]，引く音[里親：砂糖屋]），④母音の無声化[文末のです／ます]¹³⁾，⑤拗音[愛情：愛憎]，等が挙げられる。

アクセントの場合¹⁴⁾はやはり高低アクセントの問題であるが、母語の干渉により強弱アクセントにすりかえたり、トーンを持ち込んだりする傾向が見られる。

また1単語としてはせっかく正しい箇所位置されるアクセントも、熟語となると不自然に聞こえたり、外国人訛り現象が見られたりして矯正が必要となる場合が多々ある。一例として「異文化理解」〈イブンカリカイ〉を挙げると、単語としての イブンカ と リカイ は 熟語として扱われる時には イブンカリカイ となるのが普通であるが、多くの場合、それぞれのアクセントを重ねただけの イブンカリカイ として不自然に発話されてしまう。また「話し相手」〈ハナシアイテ〉の ハナシ と アイテ は熟語では ハナシアイテ だが、そのまま ハナシアイテ になり易い。

3-(4)-4 その他の問題点

この項も学部留学生に限らず外国人留学生全般の問題点だと言えよう。彼らの日本人との間に起こるコミュニケーションの問題であるが、日本語に関してはかなりの程度の自信があっても、日本人学生とは表面的なつき合いのみで、価値観に関する事柄や踏み込んだ内容・問題について真剣に語り合うような機会がなさ過ぎると感じる留学生がいる。また留学生は滞日経験も浅

く、日本語力も日本人学生より劣るため、ともすれば日本人の反応に、全人格を否定されたような気持ちを抱くことが少なくない。

日本語教育をはじめ国際交流事業等で外国人留学生と関わる我々は、彼らの学際的な側面のみならず情意面においても配慮や適切な指導が必要である。

ここまでに大学学部における日本語教育の現状、専門課程での必須能力と前提条件、留学生の日本語授業におけるニーズと問題点などを挙げた。これらの問題の解決なしには、学部留学生が大学の専門課程においてスムーズに勉学や研究に取り組むことは難しい。本稿第1節「はじめに」のところで「橋渡しの」日本語教育あるいは専門教育との「同時並行的」日本語教育の必要性について述べたが、「学部教育との連繫を重視した日本語教育」について次節で考察することにする。

4 学部教育との連繫重視の日本語教育

前節では、留学生が学部入学時までに必要な一般的日本語力とそれに対する彼らの日本語力の実態、更に大学生として必要な知的・文化的活動としての日本語力とそれに到達すべく日本語学習に対する留学生たちのニーズ等を見てきた。

学部留学生が日本語学習経験から習得・集積した日本語力を基盤として更に3年次からの専門課程に無理なく入っていくためには「橋渡しの」な日本語教育が、また1年次ですでに専門課程の数科目が設置されている場合には、その日本語力を基礎として履修している基本及び専門科目を更に援用できるような「同時並行的」な日本語教育がぜひとも必要である。この節では、上記の両者を熟さない呼称ではあるが、便宜上、「学部教育との連繫を重視した日本語教育」（以下「連繫教育」という）とまとめて呼び、大学学部における日本語教育の目標を「自学自習を行う素地作り¹⁵⁾」に置いて考察を進めていく。

「自学自習」の能力というのは、「専門課程に入る時点までに将来必要とする語彙や漢字（当用〔常用〕漢字のみではない）をすべて習得しておくということではなく、必要な時に必要なことを自分で調べ、身につけるという能力」のことである。¹⁶⁾この中では語彙と漢字の学習に限って述べられているが、そればかりではなく勉学や研究遂行上必要な総合的日本語力を自分の努力で獲得していくための基盤を築く、ということにまで適用したい。

この目標達成のための「連繫教育」授業の総合的な内容としては、①大学での基礎及び専門教育を修めるために必要な言語行動に関する諸能力の養成法と、②各種の高度な日本語表現に触れ、そこから知識を吸収し運用に繋げる方法を日本語学習過程の中に盛り込むことである。

このレベルでの特徴としては、一つに授業ではドリル等の言語的練習は特に行われず、また文法説明等のいわゆる教育的な調整や配慮は強調されないことから、「外国語としての…」というタイトルは名実ともに授業内容から除外されていることが挙げられる。また、日本語表現に反映するところの日本文化の背景や日本人の考え方に対する認識のための説明等は、日本語の知的側面をみがく意味で重要な要素として授業全体を通して折に触れて取り扱われるよう工夫が必要である。このようなことを念頭におき、この「連繫教育」授業では日本全般の理解を深めるための生の教材が選ばれ活用されることが不可欠である。

語彙に関しても、理解と運用の両面の能力を養成すべくできるだけ増大させる必要がある。学部入学前の5,000～6,000語では、語彙力としては弱過ぎ、当然、専門分野の授業では役に立たないであろう。「連繫教育」での目標語彙数としては10,000～30,000語で、学習者それぞれの専門分野の語彙を中心とし、次に応用範囲の広さが期待できる語彙を基本及び専攻科目で扱われる内容を睨みつつ習得させる。日本人の中学卒の語彙数と同数ではあるが、その内容はもちろん主として専門分野に関する語彙ということで中学卒とは異なっているはずである。語彙と並んで漢字なども、できるだけ造字力・造語力

のあるもの、語彙同様に応用範囲が広くて使用頻度の高いものが盛り込まれるべきである。

さて、以下の項では、「連繫教育」における4技能の方法について考察を進めていく。

4-(1) 聴 解 指 導

聴解力養成上の目標は、講義や談話の内容が聞き取れ理解できることであるが、目的によっては、大要（大意）を理解しコミュニケーションに必要な事項が押さえられさえすれば良しとするものと、全集中力を注いで細部までの正確な理解が必要なものとがある¹⁷⁾。さらに発話の流れに沿って理解できたと頷くだけでなく、理解したことを要約してみる等、聴解力における応用技術の習得もこの項の目標に含まれる重要な能力である。

さて現実の場面で「聞く」ということはその特徴として、時間性と一回性の制約があることが挙げられる¹⁸⁾。また、すべての文が完結文として成立しているわけではなく、更に主語と述語の関係が省かれていたり倒置文が現れていたりすることが多いのも特徴の一つである。また話者の使用語彙の選択から話す速度・発声法の領域に至るまで一切、聞き手のコントロールが効かないこと等を含め、このような特徴は即学習者の聴解力習得過程の問題点となり得るのである。文字や視覚材料の援用がなく話だけを聞いて理解するということは、聞き手の集中力を極度に要求するものであり、話が長ければ長いほど聞き手の負担は大きいのである。また発話の中に学習者にとっての未習語や非理解語（特にそれらがキーワードであったりする場合）が出てきた場合、前後の文脈から類推できる以外は聴解の目標は達せられなかったと同じことになってしまう恐れもある。

そこで、聴解の能力や技術を高めるための効果的な方法を考えねばならない。次に掲げる指導法は、教室内であるいは独学習の過程でも可能な具体的内容である¹⁹⁾。

1. 単語レベル→文レベル→内容レベルの聞き取り訓練を重ねること
2. 話を聞きながらポイントをメモすること
3. 未知の言葉（や非理解語）に出会っても、その先を聞いてみることにすること
4. 話題の展開に積極的な関心を持つこと
5. 音声や語句を正確に把握する訓練を継続して行うこと
6. 多種多様な内容を聞いてみることにすること

学習者が毎週ある授業に出席して講義を聞く場合、まず初めの聴解行為が次にはその内容をノートに取り、要約し、更には編集するという記録行為に変わり、やがては試験の答案・レポート・口頭発表の資料として完成させる表現行為へと発展していくわけであるから、ここでも総合的な言語行動能力を常に念頭に置いて指導しなければならない。

4-(2) 読 解 指 導

読解力とは、書かれてある事柄が理解できることであるが、常識的にはその内容の「理解度」と共にあるレベル以上の読む「速度」をも含めて定義されていいであろう。日本語学習途上にある留学生の読解力を開発する上での目標は、「いろいろな読書目的に合わせて精読、多読、粗読の何れか適当な読み方を選び、その読み方で意味の把握を可能²⁰⁾」にすることである。

現在多くの学部教育において、授業進行や宿題等は活字教材が主流であり、留学生が勉学や研究の過程で扱うところの日本語文献は、漢字系学生にとっては非漢字系学生に比べて数倍も有利ではあるが、全般的には受験のための予備教育時代に比べ多岐にわたって格段の差があるのが特徴であると言える。例えば、①読書量の多さ、②扱う範囲の広さ、③文や章の複雑さと長文の多さ、④語彙量の多さと抽象語・漢語の拡大、⑤文体の多様さ、等に当然、内容の難しさが加わる。それにもかかわらず晴れて大学生活を始めんとする漢字系学生の多くは意欲意識や知的関心が旺盛で、難しい文献の読書には意外と厭わずに挑戦するものであると感じた経験がある。

ここで、「連繫教育」の場において行われるべき読解の能力及び技術を高めるための効果的な内容と方法について述べてみよう。

1. この項の目標のところでも述べたが、まず多種多様な文献と文章を読み、量とスピードを重視した「多読」、文献を的確に読みこなし、質と行間の推測等を重視した「精読」、skimming, scanning を行って素早く全体の論述展開を推測し専門用語やキーワードを捜し、詳細読みの価値があるかの選別能力と読みの早さを重視した「速読／粗読」法を身につけさせることが重要である。
2. 内容把握のために、段落ごとに、更に章ごとに要約をさせてみる。また学習者が文構造を的確に理解しているかどうかを音読によりチェックし矯正することも読解の過程で必要である。
3. 学習者が読む文献は、専門書の類から新聞・雑誌の記事や広告、文学書から日記文や手紙文に至るまで多種多様である。これらの文献には漢語表現、文語表現、修辞表現等が頻出し学習者にとっても戸惑いが多いと思われる。指導法としては、種々の辞典のうちどれに当たればよいかの知識を与えると同時に、折に触れてこれらの表現に親しませることが得策である。
4. 日本語の読解における最も大きな問題の一つは漢字である。このためには漢和辞典を使いこなす能力を養成することが必要となる。漢字の読みのためには漢字系学生であっても日本語における漢字の基本的な書き方に習熟させておくと効果的である。また日本人が日常よく用いる略字(卒→卒、職→𠂔、門→𠂔、働→𠂔、喜→𠂔等)も数はそれほど多くないので機会を得て教えるか、または熟語として表れることが多いので推測等から習得させる必要がある。
5. 次に語彙であるが、文献の中には軽卑語・俗語の類から方言、外来語から略語まで数多く表れ、学習者にとっては専門用語と同じかそれ以上に厄介なものである。まず慣れさせるとともに辞書や「現代用語の基礎

知識」等を活用させるのが肝要であるが、この種の語彙に出会ったら、やはり随時意味を明確に与え、文の中・文脈の中で覚えさせるとともに²¹⁾関連語彙も比較対照させて与えることが効果的である。

4-(3) 口頭表現指導

外国語学習での4技能のうち、「話す」というのは能動的な行為であり、「話せる」ということが「外国語ができる」に結びつけられる社会的傾向が往々にして見受けられる。積極性を持って発話を重ねることで成果が現れることも手伝ってある意味では努力のし甲斐のある技能分野でもあろう。我々の周囲にいる「日本語が話せる人達」にも次の3種類のタイプがあるようである。①構文上の細かい誤りよりは日常生活に必要なコミュニケーションの手段として話せるタイプ、②学習による発音・構文等を備えた自然な会話ができるタイプ、そして、③文構成の正確さはもとより、内容的にも複雑な仕組みや思想を伝達することができる本格的表現の使い手と言われるタイプ、などである。

さて「話す」能力を「口頭表現」能力と呼称することにするが、大学レベルの学部留学生に要求される口頭表現能力とは、単に会話の受け答えができるというのではなく、「材料(談話や講義、書物)の内容を把握し、客観的に第三者へ伝達する能力²²⁾」のことである。この能力を獲得することにより、ゼミでの発表や討論、教授への報告や勉強仲間への口頭伝達もスムーズに遂行できるわけである。また、研究レポートや論文を書く上でも必要な表現力は口頭表現の習熟なしでは成功しないことを学習者に喚起して指導に当たることが必要である。ここで「連繫教育」の授業における口頭表現能力の効果的な内容と方法のいくつかを下記に挙げてみる。

1. まず発音・アクセント・イントネーション等に関してであるが、留学生は母語の影響等で幾分かの不安な側面があるとしても、普通は予備教育の段階ですでに母語の音声体系と日本語のそれに関する基本的な特徴

を把握し、ある程度の構造的な理解もできている。そのためこのレベルでは特に発音やアクセントについて教えたり訓練したりということはしない。しかし、異言語習得途上の者の常で初出の単語等が与えられると、既習の単語に似た発音やアクセントを以て試みる傾向があるので、教師は学習者に対し発音から語調に至るまで問題がある場合には、その問題点の指摘・分析・矯正及び改善指導を行わなければならない。

2. 大抵の「連繫教育」の場では、留学生のみの少人数クラスで活発な授業が行われることが多いので問題点を見過ごしがちであるが、欧米系学生に比べアジア系学生は、多人数・公式・日本人同席等の場面になると、話す能力そのものよりも態度や振舞いに積極性や活発性に欠けるきらいがある。口頭表現の能力のみならず、人前で話す力をつけたり、それに慣れさせたり、質疑にも堂々と応答できる環境作りなり精神的なガイダンスなりも必要となろう。このような状況に対応するには、できるだけ学習者の専門分野に連繫したテーマを設定して模擬討論や模擬発表、それにスピーチ等を持ち回りで行うのが効果的である。これらの訓練を通して学習者は、討論でのマナーや主体的参加、発表やスピーチのための情報収集や必要条件の認識等、さまざまな効果が得られるはずである。
3. 学部留学生は口頭表現の能力や技術の範囲を更に広げ、さまざまな問題について日本人と対等にしかも真剣に話したいという要求を持っている。中国からのある留学生の話によると、日本人学生から「天安門事件」についての討論を挑まれた時、自分の確固たる真情を母語で述べるようには当時の日本語力不足のため述べることができなかったのが悔やまれたそうである。以来、自分の日本語学習の目的は、自分のことではなく特に「自分の国」の事柄について日本人と日本語で話す時に中国人として説得力のある弁明や討論ができることであると言っていた。このような状況にある学習者の意欲と潜在能力を引き出すことも重要な方法の一端ではあるが、この「連繫教育」の場では、基本的には各種の状況を設

定しその状況に応じた口語表現をできるだけ与え、複雑な議論や説明を想定してまとまった文章を作る口頭訓練が必要であろう。

3-(4) 書き表現指導

「書く」というのは「話す」と同様に能動的な行為であり同時に創造的な行為でもあって、4技能のうち他のどれにも増して学習者のエネルギーを必要とするものである。日本人学生にまじって勉学する学部留学生にとっては、レポートや筆記試験、更に学年が進むと研究課題レポートや卒論等、質量ともかなりまとまった文書作成作業に取り組まなければならないが、その時それまでに培った日本語の言語行動能力を総合しての集大成である文章表現力が問われるわけである。そこで、専門課程において要求されるレポートや論文に備えて、論理性を持った文章が書けるようにするのがこの「連繫教育」での書き表現指導の目標となる。

文章表現の作業は言語能力を総合したものだけあって、指導する教師のコントロールなしではその範囲と深さは際限がないものと言えそうである。そこでまず、具体的には文章形式の訓練が必要であるが、その内容・形式共になるべく現在の生活状況と結びついたものや学部生としての勉学や研究に関連性のあるものを重点的に与えるべきである。その主なものは、

1. 日常体験する具体的な叙述を織り込む叙述文
 2. ある事実・意見・通説等を具体的・客観的に検証したり、観察したりする記録文
 3. 文献の中から段落ごとに要約したり、キーワードを捜して全体を説明したりする説明文
 4. ある目的に添った調査をして報告をする報告文
 5. ある見解に解釈を加えたり、自分の意見を論述したりする論述文
- 等が挙げられる。²³⁾

これらの文章形式の練習を「連繫教育」の場で実施するに当たっては、①

文章構成法や推敲法に関する説明・重要表現や決まり文句等の導入等はクラス全体の講義形式で、②作文作業はなるべく専門領域に関連したテーマ別に、時には自由テーマで学習者に主体性を持たせて個々に、そして、③添削は教師と学習者が個別に行うこと、が書き表現能力や技術の開発を効果的に習得させるための必須条件である。

ここで、学習者に対し教師が個別的に行う添削について述べることにするが、教師は学習者（作者）の発想を尊重し表現意図を十分に確認しながら行わなければならない。更に彼らの個性的な文章表現力や思考力を効果的に引き出せるような指導が行えるよう努力することが肝要である。²⁴⁾

添削においては一定の留意基準事項を設けて行うのが得策であるが、それらを以下に列挙すると、

1. 作文の事前作業である要約やアウトライン作りは的確・効率的に行われているか
2. 起承転結の展開法は論理的に行われているか
3. 文章や文体と語彙とのバランスが良く取れているか、使い方が正確か
4. 文体の統一がうまく図られているか
5. 文の構成が複雑過ぎないか、逆に幼稚過ぎないか
6. 文章が長過ぎないか、逆に短過ぎないか
7. かな書きが多過ぎないか、逆に漢語主流の文になっていないか
8. 決められた期日までに完成度の高い作品が期待できるか
9. レポートや論文作法に適っているか

等が考えられる。

作文行為というのは、「ひとりひとりが自己表現を模索し、確立していこうとする過程である。作文そのものが、書いた人の感情や思考、体験の集積であるとも言えよう。したがって、その行為を通じて日本語形成ができるのみならず、広く日本語の背景にある文化への接近を可能にする側面を持つ」²⁵⁾ものである。漢字系学生にとってこの作文行為は、不得手だと自認している発

音上の難や口頭での自発的表現の欠如及び人前での不活発な言語活動を一時片隅のほうに置いて、断然有利で得意の漢語用語を駆使して自己を表現できる絶好の機会である。彼らの作文行為に対する教師の積極的な環境作りや励ましが、作文効果につながる可能性は大である。

以上、4技能について述べたが、「連繫教育」の場では各技能分野をそれぞれ独立して指導するというのではなく、どのような科目名の授業のもとにどんな教材や教授法を扱うとしても、これら4技能を効果的に連繫させるとともに学習者の意欲性を持続させるような授業運営を行うことが肝要である。更に教授者は常に自分の授業運営法を評価し、必要に応じて変えていくことができる柔軟な対応も必要である。

5 お わ り に

日本の大学や大学院に学ぶ外国人留学生数の増大に伴い、彼らの背景、学習目的、専門分野、それに資質等もますます多様化してきている。留学生の多くは大学入学後も正規の授業科目として、あるいは補習教育として日本語教育を受けている。その日本語教育は知識の獲得にとどまるだけの教養語学では決してなく、彼らの日常生活及び勉学や研究の遂行上必須とされる言語活動の4技能の習得と、母語の介入なしでの理解力と思考力の養成である。したがって、これらの総合的日本語能力と技術を留学生がそれぞれ自分の努力で獲得していくための基盤を築くということが、留学生と日本語教育担当者双方の共通の目標となってくるわけである。

この目標の達成に向けての学部での日本語授業には、ただ難しい内容のものをというのではなく、学部の基礎及び専門領域の科目との連繫を重視した内容とレベルを備えたものを扱うよう留意することが肝要である。

筆者は本稿では、留学生教育をおおむね日本語教育の枠内で捉えてきたが、

この留学生教育の効果的な実施を大学のカリキュラム全体の枠内で考えれば、日本語教育担当者と専門分野の教授者、プラス日本人学生達との連繋と連携の確立による対応が不可欠である。更に大学を取り巻く社会では、留学生をただ視野に入れているというだけでなく、外国人であるが故の特性を持った彼らと直接・間接の交流やネットワークをより積極的に築いていくことが今日の課題として望まれるところであろう。

注

- 1) 『我が国の留学生制度の概要〔受入れ及び派遣〕』文部省学術国際局留学生課 1988年
- 2) 窪田富男「留学生に対する日本語教育」『講座：日本語と日本語教育』第15巻 明治書院 1991年 p.183 参照
- 3) 『21世紀への留学生政策』文部省学術国際局留学生課 1985年
- 4) 奥田邦男「大学の日本語教育の現状と問題点」『講座：日本語と日本語教育』第16巻 明治書院 1991年 pp.218-220 及び『国際教育交流実務講座』第4巻 教育交流社 1993年 p.36

文部省の「日本語教育施策の推進に関する調査研究会」は「21世紀への留学生計画」を発表した。それがいわゆる「留学生10万人受け入れ計画」である。当時の中曽根首相の21世紀を目指して「フランス並みの10万人」という規模の留学生を我が国に受け入れよとの指示で設けられた懇談会が昭和58年（1983年）に出した提言であるが、同58年に国内の大学等に在学する留学生総数10,428人を基礎に、中期的・長期的予測を立て、前期（昭和58年～平成4年）の伸び率平均16.1%増、後期（平成4年～12年）の伸び率年平均12.1%増として、留学生数が前期末の平成4年には4万人、後期末の平成12年には10万人に達すると想定した。ところが実際には表1で明示されたように、年平均38%増という速さで進んでいるのである。

- 5) 『我が国の文教施策』平成5年度 1993年 p.468
- 6) 同書 p.469
- 7) 森田芳夫「戦前朝鮮における日本語教育」『講座：日本語と日本語教育』第15

- 巻 明治書院 1991年 pp.109-126 及び 平野日出雄「中国人日本留学生の日本語教育の歴史と松本亀次郎の功績」『日本語教育』60号 日本語教育学会 1986年 pp.66-78 参照
- 8) 『国内の日本語教育機関の概要』文化庁文化部国語課(1982年, 1987年, 1992年, 1993年) 調べより集計して作成
- 9) 佐藤洋子「上級段階における教育内容」『講座：日本語教育』第16分冊 早稲田大学日本語研究教育センター 1980年 p.46 参照
- 10) 同書 p.44 参照
- 11) 大塚純子「中級初期の表現指導」『講座：日本語教育』第21分冊 早稲田大学語学教育研究所 1985年 p.13 参照
- 12) 大村益夫「中国人・朝鮮人に対する漢字語彙教育について」『講座：日本語教育』第1分冊 早稲田大学日本語研究教育センター 1965年 及び『中国語と対応する漢語』文化庁 1978年 参照
- 13) 「発音」『教師用日本語教育ハンドブック』6 国際交流基金 1981年
- 14) 『日本語発音アクセント辞典』日本放送協会編 1979年
- 15) 木村宗男「留学生に対する日本語教育の最終目標について」『日本語教育』22号 日本語教育学会 1973年
- 16) _____「最終目標と学習段階」『講座：日本語教育』第15分冊 早稲田大学日本語研究教育センター 1979年 p.55 参照
- 17) 新屋映子「日本語中上級学習者の聴解能力について」『日本語教育』79号 日本語教育学会 1993年 p.126 参照
- 18) 佐藤洋子「聴解指導の問題点」『講座：日本語教育』第19分冊 早稲田大学語学教育研究所 1983年 p.44
- 19) 同書 pp.43-56 参照
- 20) 駒井明「上級の日本語教育」『日本語教育』71号 日本語教育学会 1990年 p.6
- 21) 立松喜久子「上級学習者に対する読解指導」『日本語教育』72号 日本語教育学会 1990年 pp.136-144 参照
- 22) 柴田俊造・下瀬川慧子・河原崎幹夫「東海大学の多様性を持つ日本語教育」『日本語教育』66号 日本語教育学会 1988年 p.36
- 23) 佐藤政光・加納千恵子他『実践にほんごの作文』凡人社 1986年
- 24) 佐藤洋子「上級段階の作文指導」『講座：日本語教育』第17分冊 早稲田大
- 234 国際経営論集 No. 8 1995

学語学教育研究所 1981年 p.90 参照

25) 同書 p.85

主要参考文献

- (1) 『中国語と対応する漢語』 文化庁 1978年
- (2) 江副隆秀『日本留学』 アルク日本語ブックス 6 1991年
- (3) 「発音」『教師用日本語教育ハンドブック』 6 国際交流基金 1981年
- (4) 平野日出雄「中国人日本留学生の日本語教育の歴史と松本亀次郎の功績」『日本語教育』 60号 日本語教育学会 1986年
- (5) 木村宗男「留学生に対する日本語教育の最終目標について」『日本語教育』 22号 日本語教育学会 1973年
- (6) _____ 「最終目標と学習段階」『講座：日本語教育』第15分冊 早稲田大学日本語研究教育センター 1979年
- (7) _____ 編「日本語教育の歴史」『講座：日本語と日本語教育』第15巻 明治書院 1991年
- (8) 『国内の日本語教育機関の概要』文化庁文化部国語課 (1982年, 1987年, 1992年, 1993年)
- (9) 『国際教育交流実務講座』第4巻 教育交流社 1993年
- (10) 駒井明「上級の日本語教育」『日本語教育』 71号 日本語教育学会 1990年
- (11) 窪田富男「留学生に対する日本語教育」『講座：日本語と日本語教育』第15巻 明治書院 1991年
- (12) 倉八順子「日本語学習者の動機に関する調査」『日本語教育』 77号 日本語教育学会 1992年
- (13) 森田芳夫「戦前朝鮮における日本語教育」『講座：日本語と日本語教育』第15巻 明治書院 1991年
- (14) 『日本語発音アクセント辞典』日本放送協会編 1979年
- (15) 『21世紀への留学生政策』文部省学術国際局留学生課 1985年
- (16) 奥田邦男「大学の日本語教育の現状と問題点」『講座：日本語と日本語教育』第16巻 明治書院 1991年
- (17) 大村益夫「中国人・朝鮮人に対する漢字語彙教育について」『講座：日本語教育』第1分冊 早稲田大学日本語研究教育センター 1965年
- (18) 大塚純子「中級初期の表現指導」『講座：日本語教育』第21分冊 早稲田大学

語学教育研究所 1985年

- (19) 佐藤政光・加納千恵子他『実践にほんごの作文』凡人社 1986年
- (20) 佐藤洋子「上級段階における教育内容」『講座：日本語教育』第16分冊 早稲田大学日本語研究教育センター 1980年
- (21) _____「聴解指導の問題点」『講座：日本語教育』第19分冊 早稲田大学語学教育研究所 1983年
- (22) _____「上級段階の作文指導」『講座：日本語教育』第17分冊 早稲田大学語学教育研究所 1981年
- (23) 柴田俊造・下瀬川慧子・河原崎幹夫「東海大学の多様性を持つ日本語教育」『日本語教育』66号 日本語教育学会 1988年
- (24) 新屋映子「日本語中上級学習者の聴解能力について」『日本語教育』79号 日本語教育学会 1993年
- (25) 鈴木義昭「漢字教育の問題点」『講座：日本語教育』第23分冊 早稲田大学語学教育研究所 1987年
- (26) _____「漢字系学生の授業と実際」『講座：日本語教育』第21分冊 早稲田大学語学教育研究所 1985年
- (27) 立松喜久子「上級学習者に対する読解指導」『日本語教育』72号 日本語教育学会 1990年
- (28) 寺村秀夫編「日本語教育教授法（上）」『講座：日本語と日本語教育』第13巻 明治書院 1989年
- (29) _____編「日本語教育教授法（下）」『講座：日本語と日本語教育』第14巻 明治書院 1991年
- (30) 上野田鶴子編「日本語教育の現状と課題」『講座：日本語と日本語教育』第16巻 明治書院 1991年
- (31) _____「日本語学習者の多様化」『日本語教育』66号 日本語教育学会 1988年
- (32) 『我が国の文教施策』平成5年度 文部省 1993年
- (33) 『我が国の留学生制度の概要〔受入れ及び派遣〕』文部省学術国際局留学生課 1988年